グリフィスの福井日記中の福井人の同定について

沖　久也

はじめに

W・E・グリフィスは一八七一年三月四日から翌年一月二十二日まで、福井の明新館にて主として物理、化学などを教えたお雇い米国人教師である。彼は福井滞在中も日記を書き、またその間に多くの手紙を姉のマーガレット宛てに送っている。これらは明治初期の福井を知る上で興味ある資料である。

これら二つの資料は、越前市在住のグリフィス研究家で著名な山下英一によって、日記については最近増補改訂版として出版された『グリフィスと福井』[1]に「グリフィス日記」（一八七一年三月一日～一八七二年一月二十二日）として、また、日記の内容を補完する意味がある福井滞在中の書簡は『グリフィス福井書簡』[2]として英文の翻刻と日本語訳が刊行されている。

筆者は二〇一二年、『化学史研究』[3]に「グリフィス講述『化学筆記』について」という題で、福井市立郷土歴史博物館にある上記の講述書の信憑性や内容などについて資料として報告をした。その際、藤田英夫が『大阪舎密局の史的展開』[4]に、グリフィス日記中の「三崎」を三崎嘯輔として、グリフィスと嘯輔が福井で交流があったと推定していることにその時は何の疑いももたずにいた。

しかし、山下は確かに五月八日の日記の三崎の注として「三崎宗玄（嘯輔）」と記しているが　その同定の根拠は示されていない。また、藤田も『稿本神陵史』[5]などの京都大学関係の史料とグリフィスの日記とを組み合わせると、嘯輔が明治四年に福井に帰省していてもおかしくないとして上記の推定をしていることが分かった。すなわち、グリフィスと三崎嘯輔が福井で交流していたことを示す史料がないことが分かった。

そこで、三崎嘯輔に関する福井藩関係および当時の嘯輔の勤務先である東校（現東京大学医学部の前身）関係の史料を調べ、両者の

交流が可能であったかどうかを調べた。その結果、嘯輔が一八七一年（明治四年）には福井にはほとんどおらず、東京にいて、グリフィスと福井で交流する機会はなかったことが分かった。これに関しては後述の「一七三崎」の項目で述べるが、この日記中の三崎は「三崎玉枝（第十四代三崎玉雲）」の可能性が高いと思われる。

この「三崎」の場合のように、日記や書簡という性質上、書いた本人が分かればよいので、名前がフルネームで書かれている場合は殆どなく、姓や呼び名のみが記されているため、同定が違っていると思われる場合や同姓のために区別されずいる場合なども考えられる。さらに全く同定されていない人物もいる。

今回の『グリフィスと福井（増補改訂版）』には人名索引も付けられ、大変便利になったが、それだけよけいにグリフィスの日記を活用するに際して、記された人名が誰であるかということを同定することは重要と考えている。

本稿は上記の思いで、山下の『グリフィスと福井（増補改訂版）』の日記中に五回以上その姓や呼び名が出てくる福井人十九人について、福井藩関係の人事履歴史料（「士族」「子弟輩」など）や本人の伝記などに基づき、その人物をなぜそのように同定したかの根拠を示す。その順序は人名索引の順序と同じ五十音順に記す。なお、最後に人名でないため索引にはないが知藩事について記した。

一　井上

グリフィスの日記中に井上は十三回（一八七一年四月八日～一八七二年一月二十二日）出てくる。その最初は四月八日で「佐々木、井上、岩淵、それに私が馬に乗った…石炭の出る山に近い村まで乗って行った」とあり、その注に山下は「井上穆（剛太郎）…明治四年学校主任お雇い教師警衛務になる。グリフィスに同行し英学修行のため上京した」と記している。

このことを裏付ける史料として『福井藩士履歴一』[6]の「井上穆（剛太郎）」の項目には「同《（明治）》四未正月十七日学校出仕、但御雇教師警衛勤」とあり、その後「明治四年六月朔月御改正ニ付免職」とある。また「同《（明治四）》年十二月八日英学修行東京、御雇米人グルーフヒス同道」とある。免職に関しては日記の一八七一年七月十八日に「井上、中村、私の護衛役人が解雇になった」とあり、さらに一八七二年一月二十二日の日記にグリフィスが福井を去る日、井上が同行したことを記している。

以上のことより、井上は山下の注とも一致しており、グリフィスの護衛役人であり、東京に行く際も　護衛としてグリフィスに同行した井上穆（剛太郎）と同定した。

二　今立吐酔（トスイ）

『グリフィスと福井（増補改訂版）』の人名索引に今立吐酔と記されているが、グリフィス日記や『福井書簡』中には一度も今立吐酔という記述はない。ただ「Tosui（トスイ：吐酔）」という名の方をそのまま記している。トスイは日記中に十回（一八七一年十月十三日～一八七二年一月十四日）出てくる。山下は特にトスイに関して注を付けていない。また、福井藩関係の史料の中にもその名前はない。トスイについて日記の十月十三日に「僧の職をやめて、私の家（新居）に来ることになった」と記していることや、グリフィスが帰国する際に一緒にアメリカに同行したことなどが分かっており、山下はグリフィスがトスイと呼んでかわいがっていた少年は越前鯖江の真宗本願寺派満願寺で生まれた今立吐酔であることを、吐酔の家族あて手紙などにより同定している。なお、詳しくは『グリフィスと福井』のⅢ章に「今立吐酔」という項目[7]で記述されているので参照していただきたい。それにより、トスイ（吐酔）が今立吐酔を指すことは間違いないと言える。

三　大岩

日記中に大岩という姓が登場するのは三十四回（一八七一年六月七日～一八七二年一月二十一日）で非常に多い。これは大岩が後述の中野と一緒にグリフィスの助手であり、グリフィスの新居が出来た時、最初から同居していたことによる。

山下は九月十一日の日記「大岩と中野が今日から教え始めた」という箇所に二人の注を付けている。そこで「大岩貫一郎は福井藩御典医大岩主一の子。明治五年二等教授洋学。明治六年理化学教授としてワイコフ、マゼットの通訳をした」とある。そして、日記の十月二十六日（明治四年九月十三日）の記述に「今日、中野、大岩が化学科の助手に任命された」とある。この事は「子弟輩」（松平文庫九二二）の「大岩貫一郎」の項に「同《（明治四）》年九月十三日、化学所庶務方兼教授手伝被仰付候事」とあり、助手に任命されたという日記の記述と一致している。また、姉マーガレット宛書簡（一八七一年十月二十八日付）には「この家（新居）に今…本多、大岩、中野が居て、このぼくの助手三人が一室に…居る」と知らせている。これらのことから、グリフィスの助手で、新居に同居していた大岩は大岩貫一郎（貫一）と同定した。

四　大谷

日記中に大谷という姓が出てくるのは七回（一八七一年三月五日～一八七一年十月六日）である。なお、三月五日は日記に名前はないが、五日の記載は「知藩事と重臣四人に会った…名刺の交換をして…」とある。この時の五名の名刺があり、五日にグリフィスと会っているのは確かなので、これも一回に含めている。なお、この

図一　藩知事ほか名刺

名刺のコピーが福井大学のグリフィスコレクション（請求番号ＭＦ二一二―五四四）にあり、そこには「大谷権少参事」とある（図一）。そして、山下も三月五日の注に「権小《ママ》参事　大谷遜」と記している。この事は、明治三年頃の職制を記した「藩制礼式」[8]に「権少参事　学監　大谷遜」とあり一致していることより、日記中の大谷は学監の大谷遜と同定した。なお、『福井藩士履歴二』の「大谷遜」の項目[9]は理由は分からないが　明治二年で記述が終わっている。

五　小笠原

日記中に小笠原姓が記されるのは六回（一八七一年三月五日～一八七一年八月十六日）である。なお、三月五日は、先の大谷の場合と同様に四人の重臣の一人で名前は日記には無いが、山下は注として「大参事　小笠原盛徳」としている。そして、大谷の場合と同様に名刺がある（図一）。しかし、先記した「藩制礼式」には「大参事　民政総括　小笠原幹」とある。また『福井藩士履歴二』の「小笠原幹」の項目[10]に「同《（明治二）》年十月十四日任福井藩大参事宣下之事」とあり、また、明治四年六月二十五日（一八七一年八月十一日）に「御用有之東行被仰出候事」とあり、一方、日記の一八七一年八月十六日に「今日、小笠原が東京へ発った」とある。この内容は小笠原幹が東京に出掛けた事実と一致している。なお、上記の『履歴二』の小笠原幹（コワシ）の項目には以下のように「牧野主殿介　田内源介隠居後改　幹吾事小笠原丹後」と記されているが「小笠原盛徳」の名前はない。しかし、当時、小笠原姓で大参事の職に居た人物は一人だけなので「盛徳」と「幹」は同一人物と考えている。すなわち、日記中の小笠原は小笠原幹と同定した。

六　カール（笠原）

グリフィスの福井日記中にカールという名前は十七回（一八七一

年七月一日～一八七二年一月十二日）出てくる。なお、笠原という姓は一度も出てこない。

カールはグリフィスの新居が出来た時に同居した少年の一人であり、後述するように　それ以前にも何回もグリフィスの旧居に遊びに行っていたことが日記から分かる。

グリフィスが笠原をカールと呼んでいたことは日記には記されていないが、姉のマーガレット宛ての書簡（一八七二年十月二十八日付）で「もう一つの部屋に笠原（カールと呼ぶ）、本山、吐酔が居る」とある。この記述からはカールが笠原姓を持つことははっきりした。

山下はこの書簡のカールの注で「福井藩士笠原千里の子か？」と記しているがはっきりと同定していない。ここ出てくる笠原千里は『幕末維新福井名流戸籍調』[11]によると、笠原白翁の三男で年齢は壬申二十一歳と記されていて結婚していない（図二）、さらに、カールは少年とは言え、十歳以下とは考えにくいことからもカールを千里の子供とは考えられない。

足羽縣足羽郡第一區本町組　濱町

第八百五番屋敷				士族	
父龍齋亡 ○笠原白翁	壬申六四	妻知於	五五	卒未五月大阪府留學校寄留	三男千里	二一
一乘町商 山田又左ヱ門亡長女		壬申三月岐阜縣十等出仕同縣寄留 父龍齋亡三男		卒未五月大阪府留學校寄留 實今(ママ)郡角間村農 中村鷹平次男	次男純一	七
		長男濱人	四四			

社寺		戸主					
西御堂町	眞宗千福寺	笠原白翁					
		四男格	十五	米町商 國島直太郎長女 妻須賀	九二	長男濱人	
				長男濱人長女 孫須豆	十三〇九	同孫	五女登宇
				長男濱人二女 孫須麻	〇七〇五	同孫	四男健一郎
				三女 孫須輪		同孫	五女
							二〇

足羽郡東郷村深見の出身、名は良、字は子馬、遵嗣良策、福井藩獄狩の元祖、明治十三年八月二十三日歿す、享年七十二。大正十三年二月十一日従五位を贈らる。

図二　笠原白翁戸籍

しかし、この『戸籍調』には白翁の四男として、笠原格（壬申十五歳）という人物が記載されている。この笠原格は、佐々木忠次郎などと一緒に明治二年春嶽より語学伝習生の辞令を受けた八人の内の一人で、グリフィスの生徒となった笠原格と同一人物の可能性が非常に強い。なぜなら日記の七月十四日、八月十四日にグリフィスは「午後、カールと佐々木に教えた」と記している。ここに記されている佐々木は佐々木権六の息子、上記の佐々木忠次郎と考えてよいからである。

さらに日記の七月二日、七月十六日、七月三十日、八月二十日そして九月十日の五回に、カールと彼の妹達が訪ねて来たことが記されている。その中で七月三十日と八月二十日には「三姉妹」という表現があり、カールの妹が三姉妹であったことが分かる。

これを手掛かりに、もう一度『戸籍調』を見てみると、格には妹は居ないが、白翁の長男浜人に須豆（壬申十三歳）、須麻（壬申九歳）、須輪（壬申七歳）の三姉妹がいることが分かった。グリフィスはこの三姉妹をカールの妹と思っていたと考えると日記の記述は説明できる。さらに、白翁の自宅は浜町であり、グリフィスの旧居と距離的に近く、子供たちだけで訪ねても不自然はない。

以上のことより、カールは笠原白翁の四男である笠原格であると

同定した。

このことから、日記の一八七二年一月二十日に「学生数人の親、本多氏、笠原氏らが訪ねて来た」とある、ここに出てくる笠原氏は笠原白翁であると考えられる。

今回、白翁のお墓がある大安寺の高橋御住職に笠原格に関する史料についてお伺いしたところ、白翁の曾孫で浜人の孫に当たる笠原茂雄と言う方が平成六年に書かれた『笠原史』[12]というものがあるとのことで御見せ頂いた。この中に笠原家の系図があるが、書かれた方が浜人（白翁の実弟で長男）の家系の方であるためか、浜人の系列の方についてはある程度のことは記されているが、その他の方については殆ど記されていない。

上記の『戸籍調』と比べると、この系図には次男純一と四男格は名前もない。ただ三男千里とその子供たちは記載されている。浜人の子供は『戸籍調』の記載と名前とは異なっているが、系図には寿々（一八六〇年生）、こいそ（?年生）、スワ（一八六六年生）、健一（一八六七年生）、トウ（一八七一年生）とあり、『戸籍調』と一致していると考えてよい。

格は四男でもあり、分家されているためかお墓も大安寺には無く、新しい知見を得ることは出来なかった。

七　桑原

日記には桑原の姓は五回（一八七一年七月二十四日～一八七二年一月十四日）出てくる。山下は日記中には桑原について注を何も付けていないが、姉マーガレット宛ての書簡（一八七一年八月十二日付）で「金曜日の早朝（八月十一日）、通訳の岩淵、ぼくの世話係を命じられた役人の桑原、召使の佐平とぼくが日本式の舟に乗って三国へ川を二五マイル下った」とあり、その注として「桑原：桑原宏　福井藩士。小寄合格。一八七一年、雑務方兼御雇師扱方」と記している。「新番格以下 四」（松平文庫九二六）の「桑原記十郎」の項目に「同《(明治)》四末正月十日（一八七一年二月二十八日）掌政堂勤、但雑務方兼御雇教師取扱方」とあり、その後「同年六月廿四日（一八七一年八月十日）出納方被仰付候事、但洋人館振退勤」とある。そして「同《(明治)》五申五月名替、記十郎事ヒロシ、桑原宏」とある。この事より、日記中の桑原は桑原記十郎（宏）と同定した。

なお、この人は最初の名前は山形角蔵、その後、桑原紀十郎、定右衛門、記十郎、宏などを名乗る。

八　斎藤

日記中には斎藤姓は五回（一八七一年五月二日～一八七一年七月十八日）記されている。山下は日記の五月二日「夜、斎藤氏、三岡、千本が私の家で食事をした」の注に「斎藤敏　少参事。明新館学校幹事」と記している。同じ内容の注が姉のマーガレットへの書簡（五月二十三日付）で「斎藤さんが新しい通訳を連れてきた」のところ

に付けられている。

なお、「士族」（松平文庫九二一）の「斎藤敏」の項目には「同《（明治二）》年十月十四日任福井藩少参事宜下候事」「同月廿四日学校幹事更ニ被仰出候事」と記されているが　その後、明治三年四月二十五日以降の記載が理由は分からないが無く、グリフィスとの関係を示すものは無い。しかしながら「福井藩職員録」（松平文庫九〇三）には「十等少参事、学校幹事」とあることから考えて、グリフィスが福井に滞在した明治四年にもその職に付いていても当然と考えられるので、日記中の斎藤は斎藤敏と同定した。

九　佐々木

日記中に出てくる佐々木姓は四十九回（一八七一年三月七日～一八七二年一月二十二日）である。佐々木姓はこのように非常に多く登場するが、後述するように日記に出てくる佐々木姓の人物は三人いるためでもある。

日記における山下の注は、三月九日「夕方、佐々木の息子に教えた」のところで、「佐々木忠次郎…十二の時、春嶽より語学伝習生の辞令を受けた」と記している。また、姉のマーガレット宛ての書簡（一八七一年三月九日付）で「佐々木さんといってぼくにもっとも関係がある人は米国に六ヶ月いた。柳本の友人で英語をかなり上手に話す」と記している。この佐々木の注として「佐々木権六…福井藩士。一八六七年藩命により渡米して武器類を買い付ける」とある。

上記の書簡の注は「士族」（松平文庫九二一）の「佐々木権六（長淳）」の項目に「（慶応三年四月）廿二三日頃アメリカへ出帆、辰正月十日江戸表より帰」とあり、また「同《（明治三）》年十一月廿五日掌政堂出仕被仰付候事、但御雇洋人取扱方」「同年十二月十二日権大属心得勤…但洋人取扱方従前之通」とあることで裏づけられる。

以上のことより、日記中の佐々木は佐々木権六であり、佐々木の息子は佐々木忠二郎（忠次郎）と同定した。

しかしながら、ルセーを見送った六月三十日の日記に「学校からは斎藤、佐々木、田川の三人に、佐々木、岩淵、私、井上、ドン・キホーテ（白い服に長靴の）と二人の役人が馬に乗った…三里行ったところでルセー氏に別れを告げて、福井へもどった」とある。これから、学校関係者で佐々木姓をもつ人物がいて、後者の佐々木は権六と考えられる。さらに一八七一年十月三十一日の日記でグリフィスは「今日、佐々木が別れをいいに来た」と書いた。これは佐々木権六が工部省からの呼び出しで、東京へ一家で移るので挨拶に来たことを指している。それにもかかわらず、一八七二年一月十六日の日記には「夜、佐々木が訪ねてきて、請求書を受けとったことを知らせた」とあり、さらにグリフィスが福井に別れを告げた一月二十二日の日記には「佐々木、岩淵、本多、他に十名の者が、苦しい行進について府中まで同行した」とある。日付から考えて、この二件は権六一家が東京に移転した後のことであり、権六や忠次郎でないことは確かである。すなわち、三人目の佐々木姓の人物がいな

表一　「佐々木」姓の人物の日付とその記述内容

日　付	内　容	人　物
1871 年		
3 月　7 日	佐々木氏からシャンペン 2 本と猿の彫刻と卓子をもらった。	権六
3 月　8 日	佐々木氏と役人と一緒に船橋の方に遠乗りをした。	権六
3 月　9 日	学監の一人と佐々木が訪ねて来た。	権六
3 月　9 日	夕方、佐々木の息子に教えた。	忠次郎
3 月 18 日	松岡へ行き、火薬工場と製造工程順を見た。	権六
3 月 20 日	佐々木に電信機の計画を説明した。	権六
3 月 25 日	放課後、佐々木と岩淵と一緒に、馬で紙漉き村へ行った。	権六
3 月 29 日	夜、佐々木の息子ら…。	忠次郎
4 月　2 日	午後、佐々木、岩淵と一緒に散歩に出掛けた。	権六
4 月　8 日	朝食、佐々木、井上、岩淵に私が馬で石炭の出る山に行った。	権六
4 月 14 日	佐々木の家を訪ねて、彼の家族に会った。	権六
4 月 18 日	佐々木と田川を夕食に招き、教育などの話をした。	権六
4 月 27 日	佐々木ナラホド（Narahodo）が来た。	権六
5 月 31 日	夜、佐々木と 5 人の学生に化学を教えた。	権六、忠次郎
6 月　3 日	大谷、橋本医者、佐々木が夕食に来た。	権六
6 月　8 日	佐々木が視学館として来た。	権六
6 月　8 日	佐々木の息子に 5 時から 6 時まで教えた。	忠次郎
6 月 14 日	午後、佐々木と長い間、興味ある話をした。	権六
6 月 15 日	佐々木の息子に教えた。	忠次郎
6 月 20 日	化学所の炉のことで佐々木と忙しかった。	権六
6 月 30 日	ルセー氏の見送り、学校から斎藤、佐々木、田川の 3 人…。	千尋
	佐々木、岩淵、私、井上などが馬に乗り、3 里行って別れた。	権六
7 月　2 日	佐々木の家で夕食、橋本医師も一緒だった。	権六
7 月　4 日	夜、佐々木氏の家へ行き、政治・道徳について話した。	権六
7 月 14 日	午後、カールと佐々木に教えた。	忠次郎
7 月 16 日	午後、佐々木が獅子舞、道化役者などの一座を連れて来た。	権六
7 月 18 日	斎藤、大谷、佐々木、田川が学校に来た。	千尋、権六
7 月 20 日	夜、本多氏が留守であったので佐々木を訪ねた。	権六
7 月 22 日	夜、佐々木、橋本、本多、桑原が夕食にきた。	権六
7 月 31 日	夜、佐々木と少年達と鉄砲工場近くの大祭へ行った。	権六
8 月　7 日	佐々木が学校の役人に 2 人を任命した。	権六
8 月 14 日	午後、カールと佐々木に教えた。	忠次郎
8 月 15 日	午後、4 時まで教えた。佐々木と岩淵と散歩をした。	権六
8 月 17 日	午後佐々木と話し、彼と岩淵と一緒に泳ぎにいった。	権六
8 月 28 日	午前、佐々木が訪ねて来た。	権六
9 月　1 日	佐々木が珊瑚をのせる台を持ってきた。	権六
9 月　4 日	佐々木とヨハンに教えた。	忠次郎
9 月 12 日	午後、佐々木と大谷が訪ねて来た。	権六
9 月 13 日	図画を始めた、佐々木氏と中野が手伝った。	権六
10 月　3 日	昼食後、馬で佐々木と岩淵と 3 人で松岡へ行った。	権六
10 月　9 日	佐々木が夕食に来た。	権六
10 月 17 日	佐々木が夕食にきた。教育の話をした。	権六
10 月 18 日	夜、佐々木を訪ねた。	権六
10 月 25 日	午後、中野、大岩、吐酔、岩淵と佐々木の家へ行った。	権六
10 月 26 日	佐々木（忠次郎）の代わりをする。	忠次郎
10 月 27 日	夕食、佐々木ともう一人上役人が一緒だった。	権六
10 月 29 日	佐々木ナラホドが訪ねて来た。	権六
10 月 31 日	今日、佐々木が別れを言いに来た。	権六
1872 年		
1 月 16 日	佐々木が訪ねてきて、請求書を受け取ったと言った。	千尋
1 月 22 日	佐々木、岩淵、本多など 10 名が府中まで同行した。	千尋

いと説明できない。

この人物は上記の記述より、学校関係者と考えられたのでその線で調べたところ佐々木千尋なる人物がいることが分かった。

佐々木千尋については「奉任判任履歴表」（松平文庫九七七）には「明治二巳十一月廿八日、一学校少管務申付候事」とあり、それ以降学校で出納方などをしており、明治四年六月「廿四日（一八七一年六月八日）任福井藩少属、但学校出納方」、「同年十二月十日（一八七二年一月十九日）任福井県少属、庶務課学校事務」になっている。以上のように、ルセーやグリフィスが福井に滞在した時には千尋は学校に関係しており、グリフィスと接触があったとしてもおかしくないので、三人目の佐々木姓の人物は佐々木千尋と同定した。

以上のように、日記中の佐々木姓の人物が三人いるため、どの日付がどの人物であるかを明らかにする必要がある。**表一**に日付、日記の内容、該当する人物を示す。

下記に、その日付に該当人物を決めた理由を簡単に記しておく。最初に分かりやすい忠次郎について記す。佐々木の息子と書かれている場合、次に七月十四日のように「カールと佐々木に教えた」とあるような場合、カールは先の笠原のところで述べたように、笠原格であり、春嶽によって忠次郎と一緒に格も伝習生に選ばれている同輩であることから忠次郎と一緒に習ってもおかしくないと考えた。次に千尋であるが、これは先に記した三件について当てはめた。ただし、七月十八日の「斎藤、大谷、佐々木、田川が学校に来た」の場合のように、千尋か権六かはっきりしないなど、決めかねたときは二人の名前を併記した。残りはすべてその内容から特に権六（長淳）を該当人物としても不都合ではないと考えてそのように同定した。

一〇　千本

日記に出てくる千本姓は九回（一八七一年五月二日～九月三十日）である。しかし、先の小笠原の項にも記したが三月五日のグリフィスの日記で「知藩事と重臣四人に会った。…名刺を交換」とあり、図一に示したように福井大学のグリフィスコレクション中に千本の福井藩権大参事千本久信の名刺が見られる。ただし、三月五日の日記には重臣の名前は無い。山下は、三月五日の日記中の注として「副参事　千本久信」と記している。

「新任官員履歴表」（松平文庫九七七）の千本久信（弥三郎）の項に「明治二己巳十月十四日、一任福井藩権大参事」とあり、名刺と一致している。また、「福井藩職員録」（松平文庫九〇三）にも「九等　権大参事　千本弥三郎」とある。以上の事より、日記にある千本姓の人物は千本久信（弥三郎）と同定した。

一一　中沢（ヨハン）

『グリフィスと福井（増補改訂版）』の人名索引に「中沢岩太郎（ヨハン）」という項目がある。日記中にはヨハンが七回（一八七一年七月一日～十一月十日）、ヨハンの父（十月二十三日）、ヨハンの母（十一月二十二日）が各一回、一方中沢はグリフィスに同行して東京に旅立った日（一八七二年一月二十二日）の一回だけである。

なお、一八七二年一月十二日の日記に「カール、石田、ジョン（ヨハンか）と相撲を取って私が勝った」とある。なお、日記の英文には「（ヨハンか）」と言う部分はなく、山下が注のつもりで入れたと考えられる。しかし、その理由や根拠は何も書かれていない。

ここから本題であるが、先のカールの場合と同様に、一つ目にヨハンが誰かということ、そして二つ目にその人物で間違いないということをはっきりさせる必要がある。

一つ目のヨハンは誰かということであるが、山下は七月一日の日

記を「山田（山田卓介）、カール（笠原）、ヨハン（中沢岩太郎）が私の部屋に来た」と記している。しかし、対応する英文は「Yamada, Carl, and Johann in my room」とだけ記されている。すなわち、日本語訳の（　）の中は山下が注として付けたものであるが、その根拠については何も記していない。カールについては上述「八　笠原」で述べた通りである。しかし、ヨハンについては、山下は同じ『グリフィスと福井』のⅡ章「五　グリフィスの福井生活」の中で「吐酔と同時にヨハンが入居した。ヨハンが誰かよくわからない。三岡の息子のことをジョウンズとグリフィスは呼んだ…ヨハンがこの三岡の息子かどうか疑問である」[13]と記している。すなわち、はっきりとヨハンを中沢岩太郎とは断定していない。

また、姉のマーガレット宛ての書簡にはヨハンに関する記述がなく、ヨハンが中沢であるということ示すものも無い。

一方、中沢が中沢岩太（山下は岩太郎と記している）であることは確かである。すなわち、一八七二年一月二十二日の日記に、中沢がグリフィスの東京行きに同行したことが記されている。この事は、中沢岩太の喜寿記念誌『中沢岩太博士喜寿祝賀記念帖』[14]の中に中沢がグリフィスと井上などに同行して東京に向ったことが記されており、確認できた。

すなわち、中沢が中沢岩太ではっきりしたが、ヨハンが中沢である点がはっきりしていない。先に述べたように、日記で中沢とあるのは、最後の一月二十二日のただ一回であり、なぜ、この時だけヨハンでなく中沢と記しているのかよくわからない。もしかするとヨハンと中沢と別人であることを示唆するのかもしれない。

そこで、中沢について調べることにした。一月二十二日の日記を見ると「駕籠と人足がどうしても二つしか集まらなかった。その一つに本山、中沢、もう一つに肥後（カスパー）、井上と私が乗って進んだ」とあり、其の二行後に「カスパーと本山をのせた駕籠屋は仕事を捨てて府中にもどった」と書かれている。これは明らかに矛盾している、なぜなら最初は本山と一緒に駕籠にのったのは中沢であったのに、逃げ出した駕籠に乗っていたのはカスパー（肥後）と本山になっている。なぜそのようなことが起こったかを見るために、この日のグリフィスの日記の原文のコピーを見た。[15]そこには山下が翻刻された英文と同じで、最初のところは「Motoyama & Nakazawa, (Casper) Higo Inowi & I pushed on.」と記されている。ここで問題は「Nakazawa」の後にあるコンマー（,）で、山下は原文に忠実に記されて日本語訳されたが　本来このコンマーは「Nakazawa (Casper),Higo」であり、そうすれば上記の矛盾も解消することになる。それを確かめるために先の日記の原文の一月二十三日ところのコピー[16]を見ると「Coolies came at 3 and we stated off Casper (Nakadzawa) & myself on the shoulders of coolies.」と記されている事を見出した。また、『グリフィスと福井』の口絵写真の中に、グリフィスを囲む福井の生徒の写真が載っている。この実物の裏に学生の名前が記されている紙が貼ってあり、そこには笠原（カール）、中野、中沢（カスパー）、石田、本山、山形と記されている。[17]ここでも中沢はカスパーとある。すなわち、中沢

は「ヨハン」でなく「カスパー」と呼ばれていたことが明らかになった。

しかしながら、本稿の日記に七回も出てくる「ヨハン」が誰かという事は現在の所全く分からず今後の課題となった。

一二　中野

日記中に中野姓は二十六回（一八七一年六月六日～一八七二年一月二十六日）出てくる。先の「三　大岩」と同様に中野はグリフィスの助手であり、新居が出来た時には大岩と伴に同居していたので出てくる回数は多い。

山下は日記の九月十一日の「大岩と中野が今日から教え始めた」という箇所の注として、中野について「中野外志男…は福井藩士。洋学を以て明新館准二等教授となる」とあり、また、日記の十月二十六日に「今日、中野、大岩が化学科の助手に任命された」と記されている。この助手の任命に関して「子弟輩」（松平文庫九二二）の「中野外志男」の項に「同《(明治)》四未九月十三日（一八七一年十月二十六日）化学所庶務方兼教授方手伝被仰付候事」とあり、先の大岩のところにも同様の内容があることを記した。すなわち、グリフィスの日記の事実と藩の人事記録が一致していることを示している。これより、日記中の中野は中野外志男であると同定した。

一三　中村

日記中に中村姓が十回（一八七一年三月二日～十月二十二日）出てくる。ただし、『グリフィスと福井』の人名索引には中村正直と中村禄三郎の二人姓名が記されている。そして、前者が九回で後者は一回（三月二日の注）だけである。山下は正直については特に注は付けていない。グリフィスと正直が最初に会ったのは　グリフィスが福井から東京に行く途中で友人クラークを静岡に訪ね、クラークの自宅で中村正直に会ったことが日記（一八七二年一月三十日）から分かっている。[18] すなわち、グリフィスが正直と親交があったのは福井時代ではなく、福井日記に中村正直が出てくることはあり得ないと考えられる。

山下は後者の中村禄三郎に関しては、上記のように日記の三月二日の注として記している、但し、この日の日記の中には中村の名前はないが、注として江戸からの同行者「護衛中村禄三郎」とあり、その注に「中村禄三郎は東京で福井藩の軍務関係の仕事につく。明治三年七月お雇い外国人ルセーの寄宿の警衛にあたり、同四年グリフィスの警備にあたる。二五石五人扶持　権少属」とある。

中村禄三郎に関して「士族」（松平文庫九二一）を調べると、明治三年「十二月十四日（一八七一年二月三日）御雇外国人福井へ被遣ニ付付附添被仰付、正月十四日（一八七一年三月四日）帰着」とあり、この帰着の日はグリフィス日記の三月四日「九時半ごろ府中

を出発した…十一時半福井に着いた」とあり、中村禄三郎がグリフィスの護衛として東京から同行したことが確認できる。また「士族」には「同《(明治)》四年正月十七日学校出仕、但御雇教師護衛勤」とある。そして日記の七月十八日に「井上、中村、私の護衛役人が解雇になった」とあるが、これは「士族」の明治四年六月一日(一八七一年七月十八日)に「御改正ニ付出仕被免事」とあり、一致している。

以上の事から、日記に出てくる中村は全て中村禄三郎であると同定した。

一四　橋本

グリフィスの日記中に橋本姓は十九回(一八七一年三月十五日～一八七二年一月十八日)出てくる。そして『グリフィスと福井』の人名索引には「橋本」「橋本医者」「橋本医師」の三通りの表記がある。山下は日記の三月十五日の「夜、橋本医者が家に来た」との注として、橋本綱維とその弟橋本綱常の二人のことを記している。また、『グリフィス福井書簡』の一八七一年六月六十一日付の姉マーガレット宛ての書簡に「医者の橋本さんを訪ねた」とあり、その注を記しているが、日記と同様に二人の名前があり、二人共なのか、どちらか一人なのかなどが分かりにくい。

このことをはっきりさせるため、「士族」(松平文庫九二一)の「綱常」の項目を調べた。その結果、綱常は明治三年十一月十八日(一八七一年一月八日)「於兵部省軍事病院医官(大阪)被仰付候」とあり、「同四未三月二日大阪江家族引越願」を出し、三月二十日(一八七一年四月九日)に家族も大阪に出ている。このことから、綱常はグリフィスが福井に来たころには福井にいなかったと考えるべきである。

一方、網維は「士族」(松平文庫九二一)によれば、明治三年十一月十三日に「任一等教授、但医学掛り」で「病院頭取可為従前之通事」とあり、その次に、明治四年八月十二日(一八七一年十月二日)松平茂昭が福井を去るにあたり「道中随従」と記されている。このことは日記の十月一日に「橋本の家に行って。彼と別れのあいさつをした」とあることと一致している。

なお、一八七一年一月十八日にグリフィスは「橋本氏へ形見を送った」と記している。この「橋本氏」は当時その家族(母堂)が福井にいてその方に渡したのではないかと思われる。

以上の事から日記中の「橋本」はすべて橋本綱維に同定されると思われる。

一五　本多

グリフィスの福井日記には、本多という姓は十六回(一八七一年六月十一日～一八七二年一月二十二日)出てくるが、日記中には本多に関する注は一切ない。

しかしながら『グリフィス福井書簡』には本多に関する注が二つ

見られる。一つ目は姉マーガレット宛ての手紙（六月十一日付）で「遅い夕食後、江戸の友人の父、本多さんを訪ねて行った。その妻と娘にも会った」とあり、山下はその注で「本多さん：本多鼎介　福井藩士…」と記している。二つ目は九月九日付の手紙で「友人の本多が江戸から福井に来てこれから六ヶ月同居する」とあり、その本多の注は「本多：本多勝三郎（貴一）二〇歳。福井藩士。沼津兵学校出身」とある。この通りだとすると、江戸の友人は本多貴一であり、その父親が本多鼎介であることになる。しかし、以下に記すように本多貴一の父は藩の家老職にあった本多修理（釣月）であることは確かである。

表二　「本多」姓の人物の日付とその記述内容

日　付	内　容	人　物
1871 年		
6 月 11 日	食後、岩淵と役人と散歩に行き本多の家を訪ねた。	修理
6 月 16 日	本多氏と娘さんが訪ねて来た。	修理
7 月 18 日	夜、橋本医者と本多氏が遊びに来た。	修理
7 月 22 日	佐々木、橋本、本多、桑原が夕食に来た。	修理
8 月 28 日	午後、東京から本多が帰ってきて、遊びに来た。	貴一
9 月　6 日	6 時半に本多氏の家に行き、物理学について話した。	修理
9 月 24 日	9 時から 12 時まで本多と散歩をした。	貴一
9 月 26 日	今日、本多が来た。	貴一
9 月 27 日	大岩、中野、本多と化学の本を読んだ。	貴一
10 月 21 日	夜、川向うの本多家の宴会に出かけた。	修理
11 月 28 日	通訳に本多と宮永が選ばれた。	鼎介
1872 年		
1 月 13 日	昼食後、本多と化学所に行き、マッチの作り方を教えた。	貴一
1 月 18 日	本多氏に形見を送った。	修理
1 月 19 日	本多氏から火鉢をもらった。	修理
1 月 20 日	学生数人の親、本多氏、笠原氏らが訪ねて来た。	修理
1 月 22 日	佐々木、岩淵、本多らが、府中まで同行した。	貴一

それに先立ち、江戸の友人が本多貴一であることをどのようにして同定したかを記す。

本多貴一に関する「士族」（松平文庫九二一）の項目には、貴一が明治二年十月、沼津兵学校に出掛けたこと、翌年五月八日に沼津兵学校で修業をしていたが、正二位様の思し召しで、東京のフルベッキ教授に付くことがゆるされた事が記されている。

すなわち、貴一は明治三年五月中に東京に出ていき、以後、日記にあるように一八七一年八月二十八日（明治四年七月十三日）に福井に帰るまで東京にいたと考えられる。グリフィスの方は福井に行く前の明治四年一月三日から二月十六日まで東京にいたことははっきりしている。この間に貴一とグリフィスの交流があったと思われるが、現在のところこれを直接しめす史料はない。

ただ、山岡次郎について、姉マーガレット宛ての手紙（一八七一年五月十七日付）で、藩が留学生として選んだのは「名前を山岡といって英語を上手に話し…江戸で数回会った」と記している。このことから、貴一がグリフィスと江戸で会っていてもおかしくはなく、そのため日記に「江戸の友人」と記したと考えられる。以上のことから、「江戸の友人」と記された本多を本多貴一と同定した。

江戸の友人が本多貴一とすると、その父親は『幕末維新名流戸籍

調』から、福井藩の家老であった本多修理（釣月）であると同定できる。

グリフィスの日記中の本多姓の人物として、後述の「一八　宮永」でも記すが、グリフィスの講義録『化学筆記』の筆記者としでてくる人物で、本多鼎介がいる。日記の十一月二十八日に「通訳に本多と宮永が選ばれた」とあり、姉のマーガレット宛ての手紙（十二月三日頃）に、今度、講義を日本語にして出版するために「藩庁は新に二人の通訳を任命した。本多という名前の一人は日本語の慣用語句、語源を専門に知っていることで有名で、外国の科学用語をそれに相当する日本語に置換える能力があるそうだ」と記している。この記述からも分かるように、また、宮永について「私の優秀な生徒の一人」というのに比べても、この人物についてグリフィスが以前から知っていた人物ではないとおもわれる。

しかし、この本多は「一八　宮永」の所で述べるように、『化学筆記』の関連者であることから鼎介であると同定して間違いない。

以上のことから、グリフィスの日記中の本多姓の人物は三人いることになる。そのために、どの日付がどの人物であるかを明らかにする必要がある。**表二**に日付、日記の内容、該当する人物を示す。以下に、その日付に該当人物を決めた理由を簡単に記しておく。

日記の七月まではすべて「修理」としているのは、貴一はまだ東京から帰っていないことによる。九月六日に「本多氏の家へ行った」とあり、十月二十一日も「本多家の宴会に出かけた」とあり、一八七二年一月十八日は本多氏などへ形見を送った。一月二十日「学生数人の親、本多氏、笠原氏が訪ねて来た」という内容から　この本多は「修理」であると判断した。

「貴一」は八月二十八日に東京から帰り挨拶に来た。九月二十四日の三時間もの散歩は貴一以外考えにくい。九月二十六日は貴一がグリフィスの新居に同居した日と考えられ、二十七日は同居している大岩、中野と一緒に化学の本を読んだと思われる。年明けの一月十三日はマッチの作り方であり、一月二十二日はグリフィスが福井を発った日で府中まで送ったということで、この両日は貴一以外考えにくい。

「鼎介」は十一月二十八日に通訳として選ばれたのは上記のように間違いないのでそのように決めた。

一六　三岡

日記中に三岡姓は一六回（一八七一年四月五日～一八七二年一月十日）出てくる。さらに別人（佐々木忠次郎）の注に、三岡丈夫が記されており（三月九日）、別件（火薬庫などの説明）の注（三月二十二日）に三岡八郎が記されているが、これらは回数にいれていない。

なお、三岡も三岡八郎とその息子丈夫の二人の可能性があるが、人名索引には三岡八郎のみである。

山下は四月十五日の日記に「夜、三岡の家へ行った」とある。その注として「三岡八郎（由利公正…）横井小南の思想に共鳴…明治

四年東京府知事に任命された」としている。グリフィスの八月二十日の日記には「三岡が「集議院」に参加するため東京へ行くことになった」とある。これを裏付けるものとして「士族」（松平文庫九二一）の「由利八郎（三岡八郎、三岡彦一父）」の項目に「同日（明治四年七月四日＝一八七一年八月十九日）御用有之東京へ可罷出候事」とある、その一行後に「東京府知事拝命、其後御用有之洋行、御用済東京寄留、非役」と記されている。以上のことより、日記中の三岡は三岡八郎（由利公正）であると同定した。

なお、日記の内容から考えて、三岡八郎の息子である丈夫と考える必要性はないので、上述のように日記中の三岡はすべて索引のように三岡八郎（由利公正）と考えている。

一七　三崎

日記中には三崎姓は十回（一八七一年五月八日～一八七二年一月十九日）出てくる。山下は日記に最初に出てくる五月八日の「今日、三崎についてドイツ語を勉強する少年十五人を小学校から選抜した」という箇所の注として「三崎宗玄（嘯輔）は福井藩医。明治六年二十六歳で死亡」と簡単な略歴を記している。日記中で三崎姓が出てくる時の多くは「ドイツ化学を読んだ」（一八七一年十二月九日）のようにドイツ語と関係して出てくる。そのため、山下は、当時の福井藩関係者でドイツ語の出来る人として思い浮かぶのは、プロシアのプレゼニウスの定性分析の翻訳があり、東京でドイツ語の私塾を開いていたことが知られている三崎宗玄以外は考えられないとして、日記中の三崎を三崎宗玄と同定されたと思われる。

筆者もそれで良いと考えていたが、化学史上でもグリフィスと三崎宗玄が福井で交流が会ったことをはっきりさせることは重要と考えて[19]、そのことを史料的に裏付けるべく、福井藩関係や宗玄が勤務していた東校（東京大学医学部の前身）関係の史料を調べた結果、意に反して三崎宗玄は一八七一年（明治四年）の大部分は東京在住であり、グリフィスと接触した可能性はないことが分かった。これに関して著者は『化学史研究』に「グリフィスの福井日記中の“Misaki（三崎）”は誰か？」という題で研究ノートを投稿し、掲載が決まっている[20]。

この研究ノート中では、三崎宗玄が東京に在住していたことを示し、さらにグリフィスの残した表紙に「HAKUZAN and Trip from FUKUI, MIKUNI」と記された手帳のコピーが福井大学総合図書

図三　グリフィスの手帳

館のグリフィスコレクション（請求記号ＭＦ一六七―一七一）にあり、その裏表紙の裏に「Misaki Tamaye」を含む六人の福井藩の医者関係者の名前があること（図三）を見つけたことを報告している。その詳細は上記の研究ノートを参照して頂きたい。

そこでグリフィスが残した手帳に名前のある「Misaki Tamaye」なる人物について調べたところ、後に十四代三崎玉雲になる、三崎玉枝であることが分かった。この件で三崎家に問い合わせたところ、十四代玉雲は玉枝（「たまえ」と読む）であることは確認できたが、グリフィスと玉枝の交流が分かるような史料や玉枝がドイツ語を読めたことを示すような史料は現在、当家には残されていないとのことであった。

筆者は、三崎宗玄（嘯輔）が一八七一年（明治四年）には勤務地であった東京に滞在していたことが分かったこと、グリフィスの手帳に名前が残されていることなどから、まだ史料的裏付けはなされていないが、日記中の三崎は三崎玉枝の可能性が高く、そのように同定する。

一八　宮永

日記には宮永が九回（一八七一年九月六日～一八七二年一月十八日）出てくる、また姉マーガレット宛ての手紙にもその名前は出てくるが、山下はそのいずれにも注は付けていない。すなわち、宮永が誰かということを同定していない。

同定の手掛かりは、日記（十一月二十八日）に「私の科に二人の通訳を任命した通知を受けた…通訳に本多と宮永が選ばれた」とあり、この内容に関する十二月三日ごろと考えられている姉のマーガレット宛ての手紙にある。この手紙では、講義を日本語訳して教科書をつくることになったことを記し、その後に「藩庁は新に二人の翻訳者を任命した。本多という名前の一人…もう一人はぼくのもっとも優秀な生徒でオランダ語によく通じていてドイツ語もかなり読む」とある。

このことと「新藩格以下増補雑輩」（松平文庫九二二）の宮永典常の項目に、明治三年十二月十二日任二等準教授のままで、明治四年十月十三日（一八七一年十一月二十五日）翻訳方を仰せつけられたことが記されている。本多鼎介の「士族」（松平文庫九二一）にも同じ日付で翻訳方になっていることが記されている。また、宮永典常は、緒方洪庵の適塾や長崎でポンペに学んだことは良く知られており、上述の「オランダ語によく通じている」ということは当然と考えられる。

以上のことから、宮永は町医者ではあるが医学所の準二等教授であった宮永典常であると同定した。

余談であるが、上記の教科書とあるのは、グリフィスの講義録である『化学筆記』である。その筆記者として、本多鼎介と門野隼雄となっていて、宮永典常の名前がない。その理由は分からないが上記の「増補雑輩」の中に宮永は十月二十九日に翻訳方を被免になっていて、門野が同日付けで翻訳方に任命されていることが分かって

いる。このことから、教科書がグリフィスの講義録『化学筆記』であることも分かった。

なお、この福井市郷土歴史博物館にある『化学筆記』については、筆者が先に記したように『化学史研究』に「グリフィスの講義録『化学筆記』について」という題でその内容なども記している。

一九　村田

日記中に村田姓は十八回（一八七一年三月五日～一八七二年一月二十二日）出てくる。

しかし、最初の三月五日は先の小笠原などと同様に当日の日記中には名前は無いが「知藩事と重臣四人に会った…名刺を交換」とあり、山下はその重臣の注として村田は「大参事　村田氏寿」と記している。小笠原の時に記したように、名刺が残されており、そこに「福井藩大参事村田氏寿」とあることによって確認でき（図一）、当日グリフィスと会ったことは確かなのでこれも入れて十八回とした。

なお、「士族」（松平文庫九二一）の「村田巳三郎」の項に「同《明治》三午二月十四日任福井藩大参事」とあり、「福井藩職員録」（松平文庫九〇三）にも大参事に「民政総括　小笠原幹」の後に「学校掛り村田巳三郎」とある。この場合も村田氏寿の名前はないが、しかし、「士族」の村田の所に「同《明治四》年十一月廿日任福井県参事」とあり、これは『幕末維新福井名流戸籍調』の記載「辛未十一月本県参事　村田氏寿」と一致し、また　名刺にも「氏寿」とあることより、日記中の村田は村田氏寿（巳三郎）と同定した。

二〇　知藩事

知藩事は人名ではないので『グリフィスと福井』の人名索引には出ていない。しかし、知藩事は日記に二十回（一八七一年三月五日～十月二日）出てくる。ただし、両者が直接会ったのは十回ほどである。日記では三月五日に「知藩事と重臣四人に会った…名刺を交換」とあるのが最初の面会である。山下はその注で「知藩事　松平茂昭」とする。この時の名刺（図一）に「福井藩知事松平茂昭」とある。なお、この図から分かるように、知藩事は英文では「Prince」と記されている。

知藩事は同定するまでもなく松平茂昭と分かるが、人名索引に出てないことと日記に二十回出ていることから最後に記した。

おわりに

本稿は、福井日記が明治初期の福井やグリフィス研究の基礎的史料として重要と考え、記されている人物の同定を試みたが、全ての人物についての完全な同定は出来なかった。しかしながら、本稿がこの日記のさらなる活用の一助になることを願っている。

謝辞

本稿を書くように御勧めくださり、さらに幾つかの福井藩関係の史料の翻刻や原稿の体裁などにもご尽力くださいました福井県立図書館の長野栄俊氏、また福井藩関係の史料の収集にご協力くださいました柳沢芙美子氏をはじめとする福井県文書館の方々、最後になりますが福井大学附属図書館の安野辰己氏にグリフィス関係の史料の収集などいろいろな面で御世話になり、厚くお礼申しあげます。

注

（1）山下英一『グリフィスと福井（増補改訂版）』（エクシート、二〇一三年）。
（2）山下英一『グリフィス福井書簡―Griffis・Fukui Letters―』（能登印刷出版、二〇〇九年）。
（3）沖久也「グリフィス講述『化学日記』について」（『化学史研究』三八巻四号、二〇一二年、一〇九～一九八頁）。
（4）藤田英夫『大阪舎密局の史的展開―京都大学の源流―』（思文閣出版、一九九五年）一三七～一四一頁。
（5）三高同窓会編『稿本神陵史』（三高同窓会、一九四二年）。
（6）『福井藩士履歴　一（福井県文書館資料叢書　九）』（福井県文書館、二〇一三年）一三六～一三七頁。
（7）注（1）、一八三～二三五頁。
（8）「藩制礼式」（福井市編『福井市史　資料編五』福井市、一九九〇年、二九一頁）。
（9）『福井藩士履歴　二（福井県文書館資料叢書　一〇）』福井県文書館、二〇一四年）一八～一九頁。
（10）注（9）、一三九頁。
（11）石橋重吉編『幕末維新福井名流戸籍調』（福井市立図書館、一九四二年）。
（12）笠原茂雄『笠原史』（私家版、一九九四年）。これは笠原白翁の曾孫に当たる茂雄氏が一族の家系について調べたもので、かなりの部分は白翁に関するものである。なお、茂雄氏は浜人の三男である環（明治十三年生）の四男である。
（13）注（1）、一三三～一三四頁。
（14）『中沢岩太博士喜寿祝賀会帖』（中沢岩太博士喜寿祝賀記念会、一九三五年）。
（15）福井大学グリフィスコレクション（請求番号MF二二―一一五）。
（16）注（15）。なお、山下の福井日記は一八七二年一月二十二日で終わっているが、グリフィスの日記はそれ以降も書き継がれており、福井大学のグリフィスコレクションにはその後の日記のコピーが保存されている。また、一八七二年一月二十三日～一八七三年三月二十五日の日記については、藏原三雪により英文の活字化がなされ、「W.E.Griffis' Journal(1872/1/23-1873/3/25)」（『武蔵丘短期大学紀要』一二、二〇〇四年、四九～七三頁）として掲載されている。
（17）注（1）の口絵の四頁上段にある写真の現物は、福井市立郷土歴史博物館にある。そこで角鹿尚計副館長にお願いし見せていただいたところ、この写真の人物に番号がうたれ、写真の裏に「1.Carl, my pet, Now Kasahara of Kobe, 1917　2. Casper or NAKADZAWA　3. Nakano-my assistant in Fukui　4. Motoyama, who came from Hig　5. Ishida　6. Yamagata　グリフィス」と記されていることがわかった。口絵にある人物名は同じであるが、口絵の説明では写真の左側から笠原、中野、中沢、グリフィス、石田、本山、山形となっている。現物の写真の裏側の番号は写真の左側から6、3、2、グリフィス、1、4、5、すなわち、左側から山形、中野、中沢、グリフィス、笠原、本山、石田であり、違いがある。
（18）注（15）。

(19) 化学史の上で「アボガドロの分子説」の日本への伝来が誰によってどのような経緯でなされたかということは興味あるテーマである。日本人がこの「アボガドロの分子説」を最初に記したのは、三崎嘯輔（宗玄）の私塾での講義に基き出版された、三崎嘯輔講述『新式近世化学』（得英学舎、一八七三年）である。それでは三崎はどこで誰からこの説を知ったかだが、本文に記したように、藤田は明治四年福井でグリフィスと三崎の両者の交流があり、グリフィスをとおしてこの分子説を知り、それによって講義したと推定されている。このことを証明するには、グリフィスの福井日記に出てくる三崎が三崎嘯輔（宗玄）であることを同定することが必要である。

(20) 沖久也「グリフィスの福井日記中の"Misaki（三崎）"は誰か?」（『化学史研究』四二巻　一号、二〇一五年　八―十九頁。）